

# 選果 AIで省力化

## 弘大など 糖度や赤み数値化も



10月9日。藤崎町の弘前大学農学生命科学部付属生物共生教育研究センター藤崎農場で、大学の技術職員らが県産リンゴ「紅玉」の選果作業を行っていた。リンゴを載せたレーンが動き、色や大きさに応じて自動で仕分けられていく。

一見、通常の選果作業と変わらないが、大きく違うのは人工知能（AI）搭載の選果機であること。国内最

作業員の人手不足が深刻化している。省力化技術の開発は、現場のニーズが非常に高い。

同社経営企画統括本部開発本部AI技術センターの二宮和則センター長は「目視選別は熟練の作業員しかできないが、AIに品種ごとの特徴を学習させれば、現場の負担を大幅に減らせる。AI選果の将来的な目標は（農家が行う）家庭選別の省力化だ」と語る。

ただ、人口減少や少子高齢化に伴い、選別に当たる



弘前大学藤崎農場に設置されているリンゴのAI選果機＝10月9日



AI選果機は、糖度や成熟具合などを数値化して仕分けができる

同社のリンゴ向けAI選果機は弘前市の農業生産法人で導入済み。50品種ほどのリンゴを有する弘前大学と共同研究に取り組むことで、多種多様な品種を使ったデータを取得し、仕分けの精度を向上させることも狙いの一つだという。同社北日本営業所の扇田直樹副

主事は「新人の作業員には品質の違いが見分けづらいが、AIを活用することでうまく判別できていると聞いている」と話す。AI選果機導入はリンゴ

のリンゴを輸出できる」と語る。ただ研究はまだ途上だ。「まだリンゴを切らずにどのようなデータをとるべきか判断できるのか見極めている段階。人の目に頼らず機械がどれだけ『おいしさ』を追求できるか」と課題を語った。

二宮氏は「リンゴに入っている体に良い成分や鮮度などが計測できないかについても試している。さまざまな試験が、大学との共同研究ではできる」と話した。（野上圭佑）